

## 蒲生干潟で見られる野鳥とそれらを支える生態系②



Fig.1 ミサゴ

魚を好んで狙うミサゴ(Fig.1)



Fig.2 チョウゲンボウ

潟湖東側のより海岸に近いところでよく姿が見られる(Fig.2)



Fig.3 ハシボソガラス

陸地を歩きながら餌を探す(Fig.3)



Fig.4,5 ハマシギ

複数羽の群れで常に行動し、1羽飛ぶと一斉に飛ぶ(Fig.4,5)



Fig.6,7 シロチドリ

同様に群れになりせわしなく動き回り餌を探している(Fig.6,7)



Fig.8,9 マガモ

9月の調査では見られなかったマガモの群れ (Fig.8,9)



Fig.10

餌となる貝類、甲殻類、昆虫類(Fig.10)

調査日 2025年10月19日(金) 9:45~11:15, 10月21日(日) 13:30~15:00

魚を好んで食べることでウオタカとも呼ばれるミサゴ (Fig. 1)。潟湖には多数のボラなどの群れが見られるため、それらを狙っていると考えられる。留鳥であり蒲生干潟では1年中観察されている。ハヤブサ科のチョウゲンボウ (Fig. 2) は9月の調査の際も海岸側の漂流木に止まっている姿が見られた。昆虫などを狙うため、内陸側の潟湖付近よりも海浜植物も多く生えている海岸側で過ごすことが多いと考えられる。ハシボソガラス (Fig. 3) は潟湖北西のハマツナが枯れて開けた範囲で地面を歩きながら餌を探している様子であった。潟湖の水際を5~6羽の群れで歩き回りながら採餌行動を取っていたハマシギ (Fig. 4, 5) とシロチドリ (Fig. 6, 7)。シギやチドリのなかまはゴカイやカニなどの底生動物のほか、泥表面に発達する微生物(バイオフィルム)を食べていることが近年の研究で分かっている。潟湖の東側の水面から岸边には9月の調査の際には見られなかったマガモ (Fig. 8, 9) が20羽ほどの群れとなって過ごしていた。換羽して冬羽になっている個体も多く見られた。餌となる昆虫類は気温も下がってきており数は大分少なくなっている。

(伊藤勝彦)